

第31回日本医学会総会2023東京 ダイバーシティ推進委員会企画2
「各学会におけるダイバーシティの取り組み」
2023年4月22日（土）13:30～15:30 JPタワー ホール

日本分子生物学会における ダイバーシティの取り組みと変遷

齊藤 典子

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

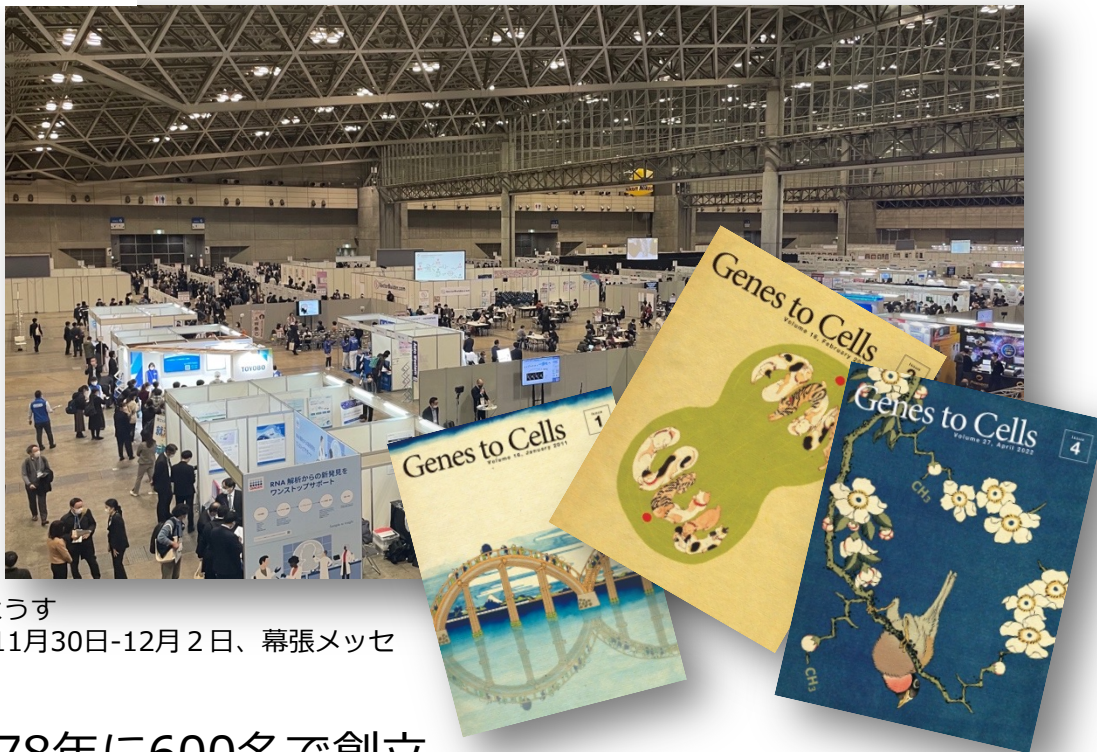
(2021-2022 理事・キャリアパス委員会委員長、2017-2022キャリアパス委員会委員)

がん研究会がん研究所 がん生物部 部長

COI 開示

発表者名： 斉藤典子

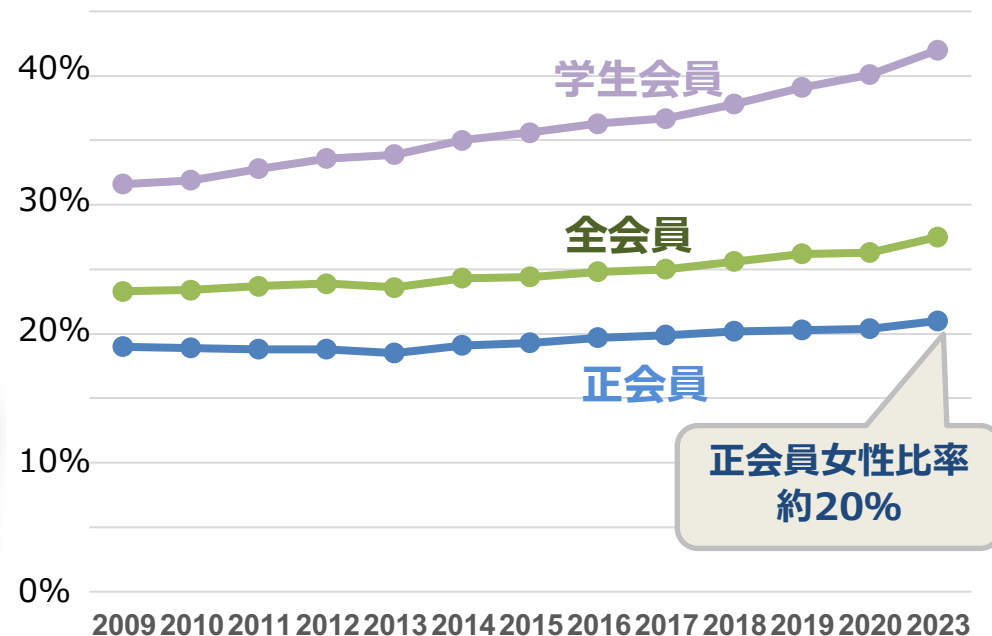
演題発表内容に関連し、発表者らに開示すべき
COI関係にある企業などはありません。



年会のようす
2022年11月30日-12月2日、幕張メッセ

- 1978年に600名で創立
- 生命科学系では国内最大規模（会員数約12000名、年会参加者約7000名）
- 学会誌は Genes to Cells
- 基礎研究者を中心に、さまざまな分野の研究者・学生が議論・連携する。学際的で自由な雰囲気
- 男女共同参画ワーキンググループ(2002-2005)、男女共同参画委員会（2005-2012）、キャリアパス委員会（2013-）を設置
- 正会員女性比率は約20%
- 理系の他分野と比べると女性が多いが、学位を取得して研究の道を歩み続ける女性はまだ少ない

分子生物学会会員の女性比率の推移



日本分子生物学会におけるダイバーシティの取り組みと変遷

1. 理事会における女性理事率の変遷と向上のための取り組み
2. 年会における女性研究者のビジビリティ向上のための取り組み



2001-2003年学会長
小川智子



男女共同参画
ワーキンググループ
創設 (2002～)
大坪久子

- ・ 2007年学会法人化以降、運営・意思決定の中心は理事会
- ・ 理事の定員は30名で、2年に一度理事選挙を実施
- ・ 理事長と副理事長は理事の中から互選（理事長1名、副理事長2名以内）
- ・ 基礎研究では、国際共同研究、海外留学生の招致といったグローバル化が重要
- ・ 会員、理事のダイバーシティに関する意識は高い
- ・ 近年、理事長と副理事長の合計3名のうち、1名以上が女性

	15期 2007-	16期 2008-	17期 2011-	18期 2013-	19期 2015-	20期 2017-	21期 2019-	22期 2021-	23期 2023-
理事長（1名中）	0	0	0	1	0	1	0	0	1
副理事長（2名中）	0	0	1	0	1	0	1	1	1



ターニングポイントは16期に迎えた危機
30名の理事のうち女性は1名のみだった



第17期副理事長
第18期理事長
大隅典子



第19・21期副理事長
塩見美喜子



第20期理事長
第22期副理事長
杉本亜砂子

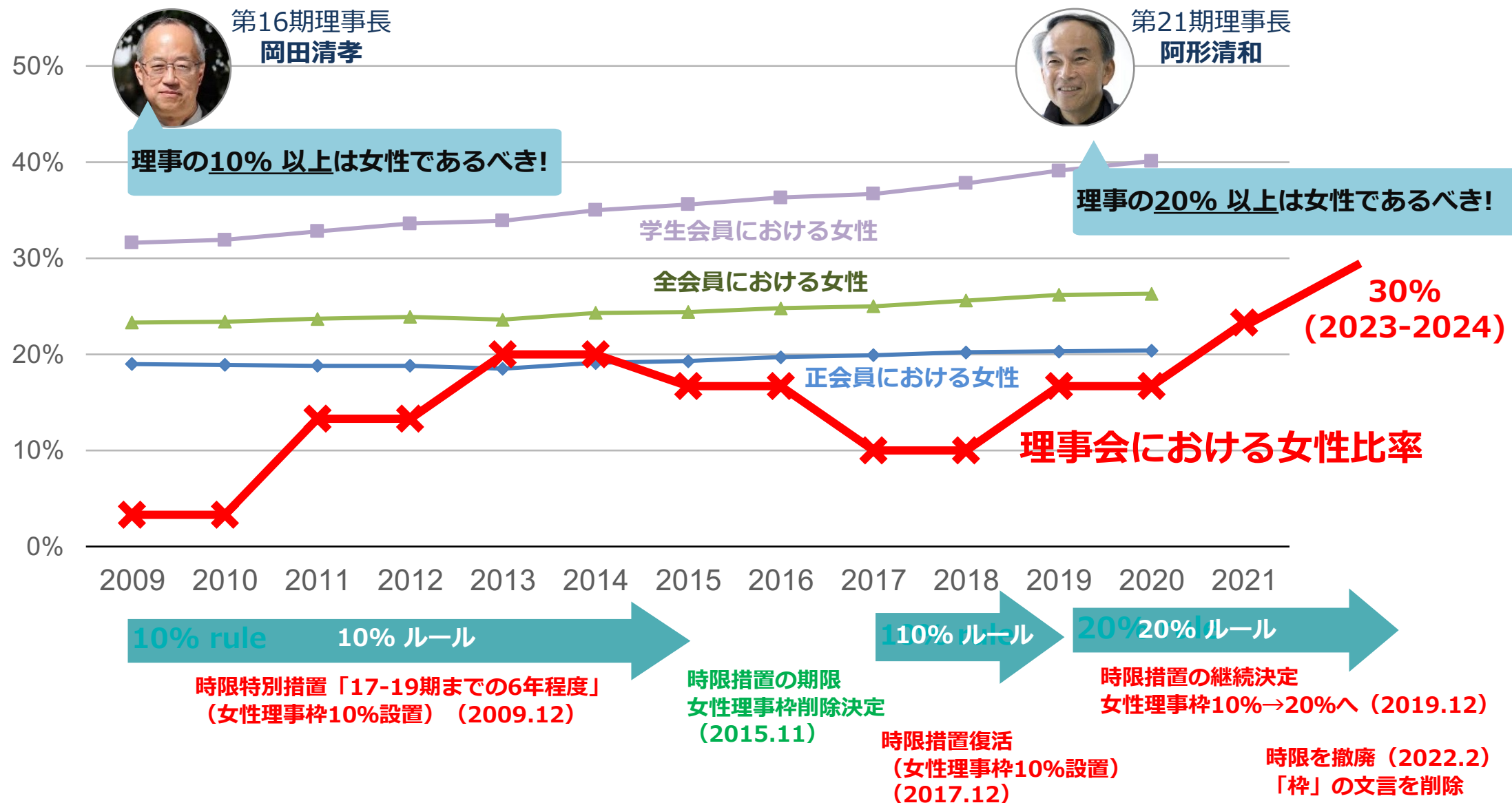


第23期理事長
後藤由季子

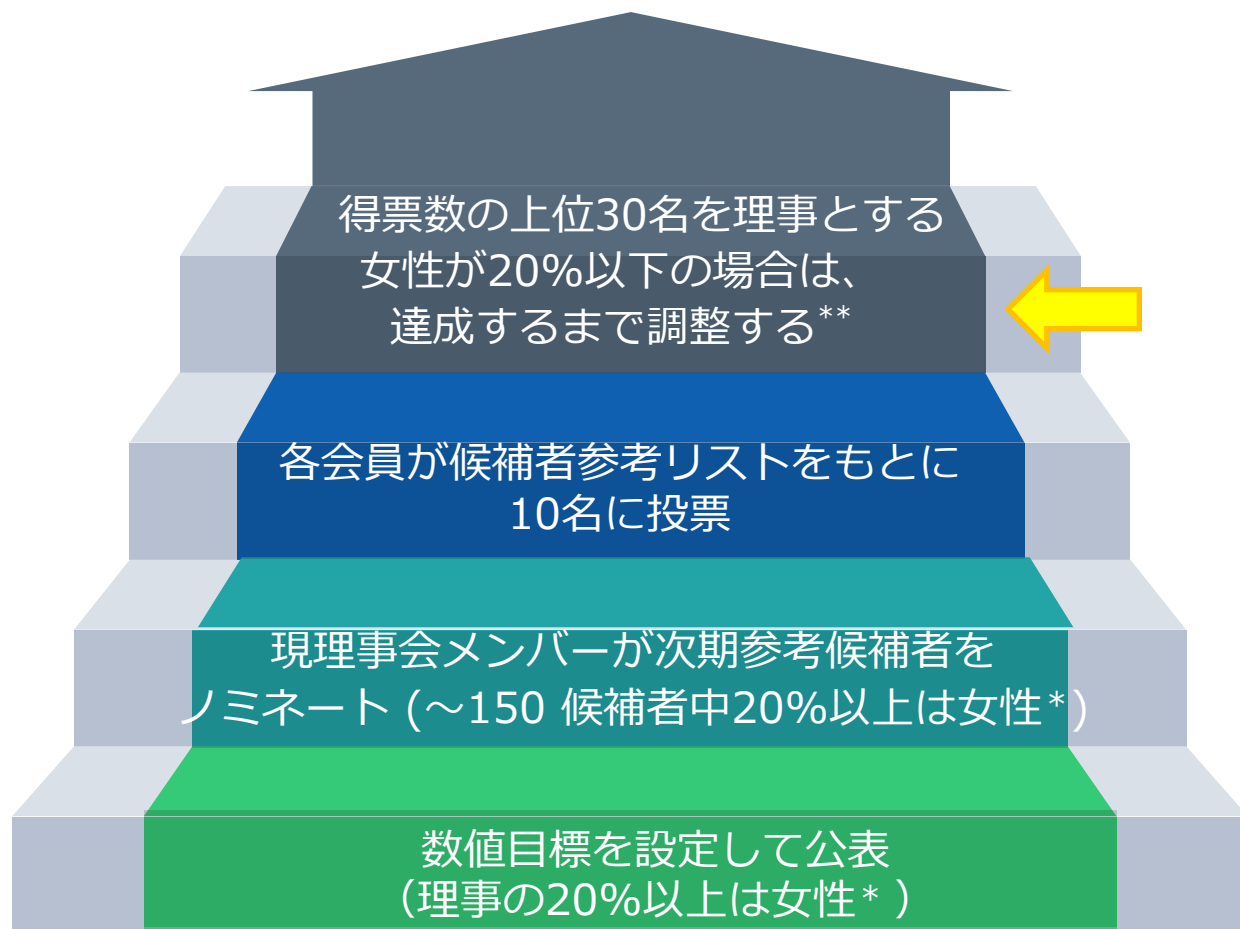


副理事長
見學美根子

女性理事率向上のための取り組み



理事選出



*2010-2019: 理事の10% 以上

*2020-: 理事の20% 以上

クオータ制（アファーマティブ・アクション）を設置

**〔学会細則（2022.2改正版/現行の細則）より抜粋〕
（第2章第2条）

理事は、次の各号に掲げる方法により選出する。

5) **理事定員30名の20%（6名）以上の女性理事を置く。**得票数上位30名の中に6名以上の女性が含まれなかった場合は、女性理事が6名になるまで、得票数上位より6名の女性を当選者とする。
ただし、理事定員30名に変更はないものとする。

しかし、結果としてこれまで、「得票数上位30名の中に～名以上の女性が含まれなかった場合」のルール適用が必要となったことはない。適用されたことはない。

理事会内で問題意識の共有と議論・検討の継続につながった

男性理事が比較的協力的で、数値目標の設定も男性理事長から提案されることが多かった（“Male Alley”）

日本分子生物学会におけるダイバーシティの取り組みと変遷

2. 女性研究者のビジビリティ向上のための取り組み

- 年会における発表者等の属性調査 -

第16期男女共同参画委員会委員長
杉本亜砂子

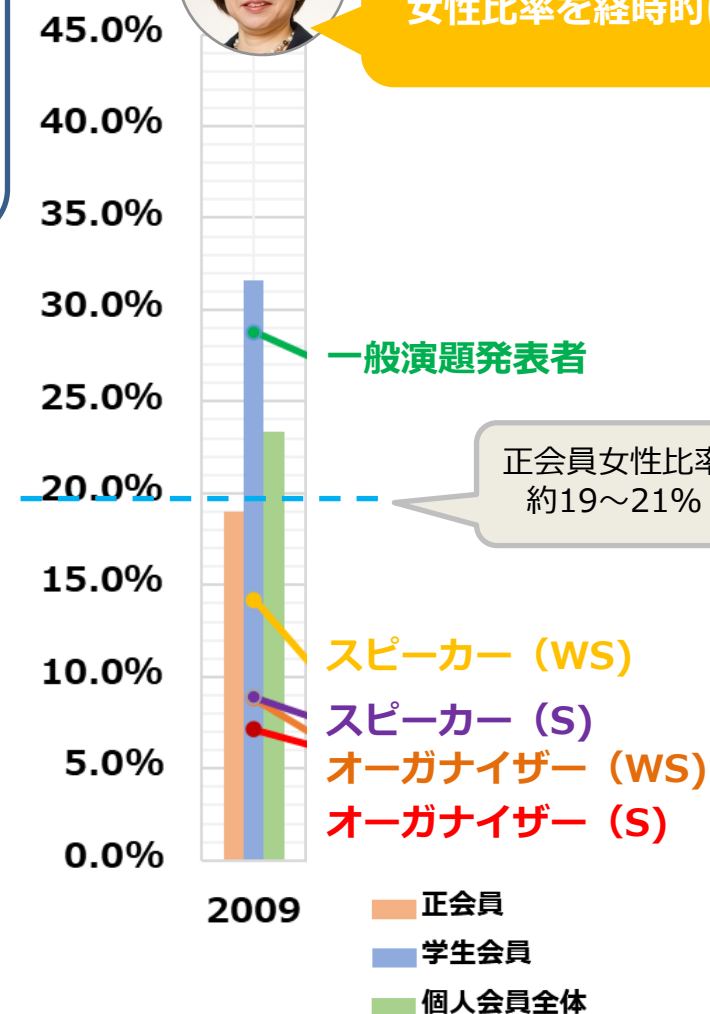


オーガナイザーとスピーカーの
女性比率を経時的に調査しよう

- ・ 研究発表の場では性差にかかわらず、研究者としてのビジビリティ（可視性）を高めることが重要
- ・ 研究機会や研究費の獲得・キャリア形成に結び付くことがある

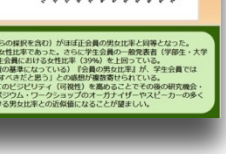
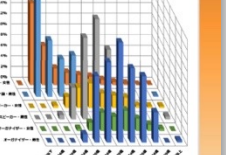
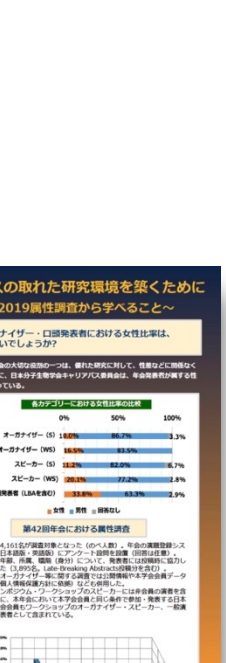
2009年「シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・スピーカーにおける女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないだろうか」という疑問が挙がった

そこで 年会発表者等が属する性、年齢、職階、発表カテゴリー等（属性）について2009年度以来、「属性調査」を行っている





発表者の皆様、年会事前参加登録時の属性調査にご協力
いただき、ありがとうございました。
これまでの属性調査結果まとめは学会HPでご覧いただ
けます。



日本分子生物学会年会発表者における女性比率の推移

第16期男女共同参画委員会委員長

杉本亜砂子

45.0%

40.0%

35.0%

30.0%

25.0%

20.0%

15.0%

10.0%

5.0%

0.0%

オーガナイザーとスピーカーの
女性比率を経時的に調査しよう

組織委員会、オーガナイザー、
スピーカー、に女性を入れよう

正会員女性比率
約19~21%

2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022

正会員

オーガナイザー (S)

スピーカー (WS)

学生会員

オーガナイザー (WS)

一般演題発表者

個人会員全体

スピーカー (S)

※2016年のWSは「公募S」の数値 (2016年はWSなし)

※2021年のSは「指定S」+「公募S」の数値

年会主催者からの働きかけは有効

公募ワークショップ・公募シンポジウムの募集要項

2014年・2016年：

「女性からの企画応募、および演者への
女性の起用を推奨いたします。」

2018年・2019年・2021年：

「女性や若手研究者がオーガナイザーや
指定演者に入っている企画を優先して採
択します。」

2020年：「女性研究者や若手研究者、
海外の研究機関に所属する研究者（日本
国籍も可）、国内の研究機関に所属する
外国籍の研究者が、オーガナイザーや演
者に含まれている企画を優先して採択し
ます。特に、女性研究者が複数含まれて
いる企画を優先します。」

2022年：「指定演者のうち少なくとも
30%程度は女性講演者としていただくこ
とを応募条件とします。」



年会長：石野史敏 佐々木裕之 上村匡 塩見美喜子 深川竜郎

「第45回年会（MBSJ2022）運営についてのアンケート集計結果」（回答者数：609名）

<https://www.mbsj.jp/meetings/annual/2022/enq.html>

質問6「ワークショップについて」（複数選択可）回答より抜粋

ワークショップ企画公募で「指定演者のうち少なくとも30%程度は女性講演者とする」ことが応募条件に入っていた点について

- ・ 賛同し支持する 139名（回答者609名のうち**22.8%**が選択）
- ・ 理解はするが適切であったか疑問が残る 131名（同上、**21.5%**）
- ・ 適切でないと思う 41名（同上、**6.7%**）

女性講演者を3割に上げる事は分野によっては大変な事であろうが経過処置として**当面は受け入れるべき**だと思う。

女性演者については努力目標とすべきである。例えば企画者の女性割合も考慮するなどしてもらいたい。

30%程度の条件を満たすために1人の女性が複数回発表することになったという話も聞く。それでは発表する女性の人数を増やすことには繋がっておらず意味がないのでは？

指定演者30%女性の方針は**ぜひ今後も継続して**ほしい。

性別関係なく研究内容で選んでほしい。

男女参画への方法としては良いかもしれませんが、ワークショップで比較的若い女性の発表とベテランの男性研究者の発表という構成が多かったように思います。若手の女性を入れるなら同年代の男性を含めるようにしないと結果的に男性優位の環境と変わりません。

（女性です。）女性であることと、能力や仕事の面白さは別だと思います。女性の講演を推すために、**より優秀な男性（が居たら）の機会を奪うのは本末転倒**だと思います。

女性枠はこれまで女性研究者の数を散々絞ってきたのに数をそろえるのは実際には難しいこともあると思う。しかし**挑戦しないと未来はない**と思う。



提言：
2014年12月2日、大隅典子第18期理事長・塩見美喜子第18期キャリアパス委員長が文部科学省を訪問し、要望書『男女共同参画のさらなる推進を目指して～女性研究者リーダーシップ養成と充実したライフイベント環境整備に関する要望～』を科学技術・学術政策局の川上伸昭局長（写真左）、生涯学習政策局の河村潤子局長（写真右）に手渡して、施策への反映を訴えた

日本分子生物学会 男男女共同参画ワーキンググループ (2002-2005)・男女共同参画委員会 (2005-2012)・キャリアパス委員会 (2013-) の活動：

- 年会保育室・託児室の設置
- 科学技術系専門職の男女共同参画実態調査
- 日本分子生物学会男女共同参画実態調査報告書の作成
- 年会ランチョンワークショップの開催
- 「女子中高生夏の学校」への協力 など

サテライトミーティングの支援：



海外トップ女性研究者と日本の女性研究者らによる国際シンポジウム

EMBO（欧州分子生物学研究所）による「研究室運営（ラボマネジメント）コースを併設専任講師、EMBO 誌のチーフエディターなども参加



理事会における女性理事率向上の取り組み

10年を経て、理事会の女性比率が正会員の女性比率と同等になった

会員、理事はダイバーシティの尊重やアファーマティブアクションへの理解・賛同ポテンシャルが高い。数値目標の設定も男性理事長から提案されることが多かった（Male Ally）

女性理事率の向上に向けて理事会で定期的に議論・検討の機会を設けたことは、問題意識を共有し、議論・検討を建設的に重ねることができた

年会における女性研究者のビジビリティ向上の取り組み

10年を経て、オーガナイザー・スピーカーの女性比率が正会員の女性比率と同等になった

年会登録の際に属性調査を行い、HPで公表している

年会主催者からの働きかけには有効性がみられる

日本分子生物学会会員、理事、男女共同参画委員会、キャリアパス委員会のみなさま
小川智子先生（元大阪大学）、大坪久子先生（元東京大学）、
杉本亜砂子先生（東北大学）、大隅典子先生（東北大学）、
塩見美喜子先生（東京大学）

日本分子生物学会事務局/福田博様、並木孝憲様、山口恵子様

ご清聴ありがとうございました

